

水の中のつぼみ

2008(平成20)年5月20日鑑賞(GAGA 試写室)

★★★



監督・脚本＝セリーヌ・シアマ／出演＝ポーリーヌ・アキュアール／アデル・ヘネル／ルイズ・ブラシェール／ワレン・ジャッカ (ツイン配給／2007年フランス映画／85分)

第2章

愛し方、愛され方はいろいろ

……思春期特有の少女の心理と生理は微妙で、団塊世代のオヤジには到底理解不可能！ そう思いつつ、フランスが絶賛した若手女流監督が描く、3人の少女のシンクロを通した「ひと夏の経験」を鑑賞したが……？ 原題、英題、邦題を対比しながら、少しでも彼女たちの生態が理解できれば立派なもの！

◆ 日本でも最近、荻上直子、蜷川実花、永田琴など若手の女性監督の進出が顕著だが、フランス映画界の新たな才能セリーヌ・シアマがこの映画を監督したのは何と27歳の時！ 2007年カンヌ国際映画祭《ある視点部門》に正式出品され、セザール賞の授賞式では、ジャンヌ・モローから「この素晴らしい映画を生み出したフランスの新たな才能、セリーヌ・シアマ。私は彼女を称えます」と絶賛された彼女の将来は保証されたようなもの……？

そんな才能は、思春期を迎えた3人の少女たちのひと夏に注目したが……。

◆ やせっぽっちでペチャパイのマリー (ポーリーヌ・アキュアール) と太っちょのアンヌ (ルイズ・ブラシェール) は高1の同級生。マリーは今日、親友のアンヌがシンクロの演技をするというので見学に来たのだが、小学生たちに交じたその演技は初心者そのもの。それに対して、フロリアヌ (アデル・ヘネル) をリーダーとする上級生たちの演技のすばらしさに、マリーはうっとり。この瞬間にマリーはフロリアヌに恋をしてしまったよう……。

といっても、60歳間近の白髪のおっちゃんには、マリーのような思春期の女の子特有の微妙な心理と生理は不可解。そのため、この映画はショートコメントに……。

◆ どこにでも1人だけ目立つ大人びた美少女がいるものだが、それがフロリアーヌ。「シンクロの練習を見せてほしい」と近づいてきたマリーを、フロリアーヌは当初無視していたが、「何でもするから」と懇願する姿を見て、フロリアーヌが考えたことは……？ 他方、2人の関係はうまくいっても、三角関係(?)になるとややこしくなるのは世の常、そして女の常。マリーの心が次第にフロリアーヌに向かっていていると知ったアンヌの対応と対抗策は……？ セリフを最小限に抑えた、3人の少女たちの織りなす微妙な心理戦(?)をじっくりと……。

◆ この世代の女の子にとっては、どんな男の子と初キスを交わすか、そしてまた誰と初エッチをするのが最大の関心事……？ しかして、アンヌがその相手にと狙っているイケメンの男の子がフランソワ(ワレン・ジャッカン)だが、マリーの目の前で、フロリアーヌとフランソワは熱いキスを……。さらに、バナナをかじっているところにケチをつけられたフロリアーヌは、「経験豊富だから平気なの……」と切り返したから、フロリアーヌの男性経験は既にたっぷり……？

ところが、実はそんなフロリアーヌにも大きな悩みがあったらしい。そのため、少しずつ心を許してきたマリーに対して、ある日フロリアーヌは誰にも言えない秘密を打ち明け、ある依頼を……。さあ、ここらあたりの微妙な描き方こそが、セリーヌ・シアマ監督が絶賛された由縁だが、私には……？

◆ プレスシートによると、この映画のフランス語の原題は『蜻の誕生』。それは、「水中のシンクロの手足を想起させる『蜻』とともに、同語のフランス語の言い回しである“厄介な者”にひっかけて、『女という厄介な生き物ができるまで』というような隠喩を含んだタイトル」とのこと。他方、「英題『WATER LILIES』は、モネの絵で有名な“睡蓮”のことで、シンクロの少女たちを水に浮かぶ花に見立てるとともに、2語に分けて読むとプールの“水”と“百合”という言葉に少女が少女に恋をする比喩を含ませていた」とのこと。

それに比べると、『水の中のつぼみ』という邦題は「“プールの中という特殊な環境に置かれた少女をととても美しく表現している”とシアマ監督も気に入っているタイトル」とのことだが、原題や英題に比べると、少しそのタイトルに含まれる内容が薄いのでは……？

2008(平成20)年5月21日記